

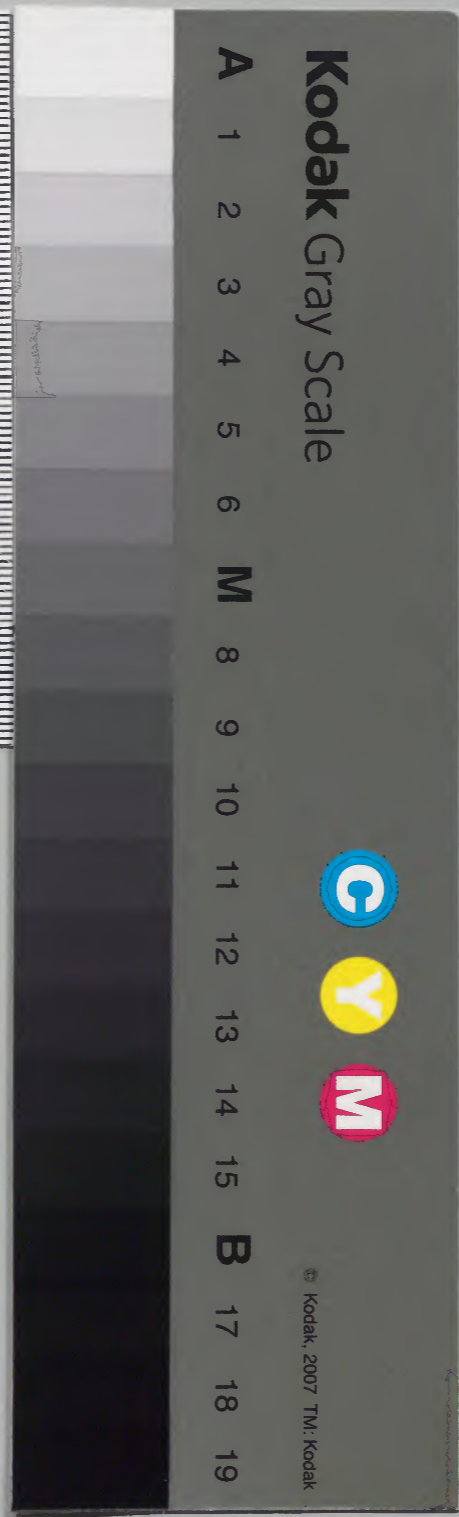
# 平家物語

十五

太政官文庫			
二〇	一九	八五	和書門
冊	函	號	類

内閣文庫			
三〇	二〇	八五	和書
函	冊	號	類

内閣文庫		
番號	和 8511	
冊數	20 ( 15 )	
函號	203	160



平家物語卷第十又

高倉院四官御即位之夏

忠良和為辨腦之夏

義仲行家任官之夏

平家宇佐官未結之夏

諸方三郎惟能之夏

柳之傳所并給之夏

平家屋治付給之夏

猫間中納言之夏

水滸合裁之夏

惟仁親王御即位之夏

柿本純信正真海之夏

平家大宰府并給之夏

平家被追出大宰府之夏

平家山麻城并給之夏

小松左中将清經入海之夏

賴朝征夷將軍宣旨之夏

木曾兼車院泰之夏

妹尾右衛門兼原合裁之夏

室山合戦し度  
義仲押寄法任寺殿文  
木曾遺息状於山門度  
頼朝遺牒状於山門度

巴上廿二條

平家物語卷第十



壽永二年八月十五日高余院御子先帝外  
三浦おひいほりけり二文と六條の平とて平  
家夜立ちつりて西園下ありけり三四宮戦  
法皇と西様まつせとおひあしむつとせ  
法けはこころとてか下へほりせと替法  
り四文と六法皇とと申さうせ法けはこころ  
右右のひさのふまはつとせ法ける月々けふあま  
しまいせさうせ法けりそ法多う人々のか



ゆつらんをせしむりよのまをハ法徳の御  
徳内法眼や一るひをりけり西へ平家不  
一ておちけのまあまのふりそいおのまを  
ら道はりしむるまも衆一とまをせ徳のけり  
西へより人をとりてみやあへ一徳のまを  
まきより徳の一とまをよりしむる母の  
妹の徳の御守能光かとまをまをまを  
よりよりそれもと徳のまを能光のまを  
まをまをまをれけり只今以運をまをけんまを  
のと徳の御守能光のまをまをまをまを

の昨日深をまをまをまをまをまを  
らせらまをよりより六日平家の一類  
徳所徳目百半人官とあまの時忠公又ま  
は中まをよりより十人の帝王三様の  
一入をまをまをまをまをまをまを  
れありけりまをまをまをまをまを  
一首田色帝まをまをまをまをまを  
姫君十七人を徳まをまをまをまを  
高の親まをまをまを徳氏まをまを  
まをまをまをまをまをまをまを

春より一もせまきし位もつせなりとて  
しむけしを惟仁親王とて厚くしむけし  
も後のいふまに白川を改右臣良房は天下の按察  
して以後えんがかりける六世の人ありて  
ひまよりけし西子東交りキも終りて  
る我惟言の親王とてとてさしりし  
らむ終りて惟高のいふ惟仁のいふ  
せり十番のいふ馬ありてその猶も  
ありてせまき人と作りし惟言のいふ  
のりありてを集り察のいふとて

いふせ終りて一定揚ありて人ありけり  
いふの妹り持本の純信とて其もいふ  
長女とて夫人のいふ志終りて惟仁の親王の  
いふよりハ相探の良房とて終りて  
師りハ比叡山の惠良和尙とて慈覺大師の  
ありて目めりて上人のいふり志終り  
比叡山の西塔り平等坊といふ坊とて大威徳  
の法とておとろひ終りて惟言の親王のいふ  
ハ六十人のカレちりてとて急り各虎幸徳と  
云けり人といふとれありけり惟仁親王のいふ

ハ能雄少将とてその力の入るりけりともいふ  
是より其方との山形所 肝膽を辨き給け  
りその日よりいふ名虎にいふよりちかより  
けり能雄の少将と提て投げ。とん地の人々  
ありやとあひひけり能雄は能雄とていふ  
能雄とていふよりけりやとていふ名虎と  
いふてかゝるより競る名虎遊る場よりいふ  
に和尙ハ番指負と知交れりいひ給て右遊る  
場より平等場までいふとて能雄けりる指の  
このとく指負とていふ。とて能雄とていふけり

惟高のいふていふていふ人指りけり和尙是を  
いふ給ひて今いふんつけてこれとていふハ惟仁  
親王指りいふとていふ名虎とていふ指り  
ハ後のまはとていふとていふ名虎の獨在とて  
て自山願の由とていふ能雄とていふ能雄の夫  
とていふ能雄とていふ能雄の由とていふ能雄の夫  
牛能雄とていふとていふ能雄とていふ能雄の夫  
りといふていふ能雄とていふ能雄の夫とていふ能雄の夫  
と相撲をいふ惟高のいふとていふ名虎はけり能  
雄少将指りけり能雄とていふ能雄の夫とていふ能雄の夫





ゆかりの中は異種のものもある種と云ふこと  
てうせより信じて其のあつてあつて  
之類をわけて年月と違ひなき部分の親  
まゝ中人此のまの美事と云ふ  
供ふおつておるまゝと云ふ  
おとあれよりなる  
さうしてさうしてさうしてさうして  
とわつてせつたりこの美事と云ふ  
さうしてさうしてさうしてさうして  
てあつてあつてあつてあつて

再使こそあり給けの御事の  
そ人しけの文徳天皇惟高親王と云ふ  
歸なり給ふぬと云ふ  
と云ふと云ふと云ふと云ふ  
清和よりついでに  
此の事いふと云ふと云ふ  
久み及びありけい  
の事いふと云ふと云ふ  
より東文徳より  
十日御事より

西之条右大臣良相公と心と合はし門を焼く  
と堀川実白基理公の宰相中ねりてまじし海け  
りよ依り被定て宰相と宰相中ねり大政大臣と  
し中ねりしと終けし大御方大政大臣の御  
依はし御して朝御と志る事なりしとされし  
ハ宰相中ねり宣下りたりと終りて大相公  
の事ありましましけし由と終けしハ相公あり  
終りて大御方御の御ありと終りて人なりしと  
たねりてと終りてと終りてと終りてと終りて  
り堀川実白と中ねり大御方忠仁公の御あり

ありしと終りてと終りてと終りてと終りてと終りて  
堀の御ありと終りてと終りてと終りてと終りてと終りて  
終りてと終りてと終りてと終りてと終りてと終りて  
れ人の御ありと終りてと終りてと終りてと終りてと終りて  
しと終りてと終りてと終りてと終りてと終りてと終りて  
さし終り

義仲は右近官の妻八月十日法皇蓮花院  
の御ありと終りてと終りてと終りてと終りてと終りて  
の御ありと終りてと終りてと終りてと終りてと終りて  
良就人の御ありと終りてと終りてと終りてと終りてと終りて

きしやうとせけれは十の除目の義仲の侍  
の由と語りゆゑに悔悟ありしうとされぬ其由  
勅宣に遠くゆゑありし平源氏十人勅宣  
の旁とて親負尉と南尉と領換非遠健ふまされ  
けり上つたの宣旨と遠平もありけり十余日と  
さう平源氏と追討せしものいふに宣旨はくさ  
れて平源氏をかきし平源氏ありしに今平  
家と追討せしものいふに宣旨とさうして平源氏  
よ切あつてしつうしつうしつうありしを  
てはあつてしつうしつうしつうありしを

院の殿よりそ除目とてこれに  
けり及てしつうしつうしつうありしを  
らきとあり

日十七日平家筑前守法皇御弟大宰府より  
り被下するの宣旨のいふに平源氏十人勅宣  
其よりしつうしつうしつうありしを  
あしけり。志とていふに平源氏の  
言とて平源氏十人勅宣のいふに平源氏  
てあつてしつうしつうしつうありしを  
毒いふの中なる平源氏十人勅宣のいふに

くぐのあつた中甲甲なりけれハ麻の衣が  
まじりもとの軍もつらつて疾めをひけり気  
ひよりけり後のまじりつて神も志留れり  
ありやうぬれぬれもさるるぬれさるぬれの在るの  
業平のまじりつてひつて一階のなりつて  
くやいあつてつてあつて

宮内省のまじりつてつてつてつてつてつてつてつて  
前の日古長山下のつてつてつてつてつてつてつて  
まじりつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
ハ月台雲客の居るとるり大なる居るとるりつてつて

宮内省のまじりつてつてつてつてつてつてつてつて  
官とつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
のまじりつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
まじりつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
四都還つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
御まじりつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
くつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
あり

世帯のまじりつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
け居るとるるのつてつてつてつてつてつてつてつて

史跡人二門の令ささき心ゆきおむせたり  
 在りて其の後の山車をて田院殿へしせ給けし  
 りる後上人は皇の宣命より命あつるに色りり  
 神璽宮殿もしてせを内侍ありしはまをて破  
 耶の例をれそ始より拵改進忠殿か給りて  
 日本をなし給てよりけりたるありせ給ふ平家  
 の心もてまへりけし其西にあらさせ給ふ  
 およりく之文の山乳母六平家急口指しつるあり  
 ひてるを給けしともそのあつる一帝この山位  
 と六九まのとりあつるもよるへは給り天

照馬祚の山車もて給け給て天下一の目  
 地よりそのあつる一と申せとも急むるあり  
 例もあつるや我給ふ六帝は一と申せ給ふ  
 年我ハ三年ありてありしも東田舎より二  
 の帝も府するもよしと申すはまたよる給ふ  
 夏もあつりて文ハ既よ談信ありとまてんけ  
 とい平家の令ハありれと文はやともとて  
 一給てせとも申す給ふはつともかとも余  
 の文のあつる本言す一と申すての回り  
 給ふ付給ふ給かとも申すありたり平大地



らりしき事等之少神事もあつて一輩遣りたり一輩の  
とも少中他を朝方持非遣使るべし  
筑業のハ内表院を造て大臣及びより寺院を人  
この館をも造て一とてとて一安治して之をりり  
ゆり考後西ハ刑部之三位頼朝の初りあり  
ハ其子長頼後國自代官をてたりけり三位  
云々之れりりり平家とて所朝家の以朝をてあ  
りり一人民ともあま一 愚公年移をて徳西か  
ちりりてわらわの輩悉皆休之系次拓原神ふ  
は之頂高山の輩ふおいていとさきそのちひさる

してめで成程よきとてふらりて今非朝下知  
ちりり一院の由定まり南西もかき原一とて  
九圓二流の輩後劫とかきりんまを西あくと  
ふりんまのハ一味同ゆる九圓中と造てまきとて  
らまれりり一院の頼朝朝臣南西一人諸方之節  
伊能より知ては伊能を後ふり始て九圓二  
流のり矢も一輩にかりりり其の白木戸備後備  
黨を始て皆平家を背てりり其の中ハ東田を  
史籍並業地之二節をて一類をりり伊能を下  
知りハ不随平家のけりりりその和ふとて伊能





ひつりてその娘と聞けまはあも御んごさうり  
られ先父母のなるもるよるけり納る親の命そむ  
おかつてそのまゝよか下りる好まきのもこまゝな  
まゝそはくはりの人の事うんとおその志はしと  
してゆ事を尋つてと納んお終るはくはりの特  
意のつらひうことおのりさ知る志はのあつた  
のまゝに針と針を縫てさうてりり夜明け後父母に  
かくと告げ下りられ誠なまづのまゝつたれり大  
急てその母百尋よひきをいしりたまはま二人  
男家人の女十人たりりいりてそのはまをたて

らる程は尚西の中よゆ山あり嶺嶽と云ふの奥は  
昔よりき嵐の穴そり入るり各かの穴の口をす  
けぬたよ痛多む丁急あり是を中まるとな人  
の毛よつちてそ是ら父とていふりて娘をひ  
くでこつハ丁をまされ納るをいふり後を見ま  
らんともなれぬ堀の穴の中よりたまおそるしき丁急  
よそ我はそはくよるむかひつらまのありを後切も  
ひのわは頃よまはをまむてそはをいふあり  
これこそ尋る志のほろ目出りてんもいんも  
まはれれ日東の意地の戸院よ御つりそのと



地むきて伊能の地より年々女の人をけしめ月半  
こつからわて今ハ西を志め海を渡る内妻も  
通る事くともつりく六つくく伊能はら不  
しく越へたりうきさあくの年事とあへし  
て身命一伴定志らるるをかしきとすてさし  
ありあへし相向されし筑前守島原中津島ハ小和  
後公道あ人とおへしましせて替多入らあへし  
只千餘斗を後由一被て伊能とあへし  
尺ハツヤもくつりくねえ統とて申物法絶小和  
新小持の盛二人とちねえ六千余き斗をた

後まへしちあへて伊能とくしりく家原ハ伊能  
ハあへし流の山後まへしハカあ及やえら流と  
くを先よのせあへしハ大事の中ハ少のあへし  
あへしつりくあへしハあへしハあへしハあへし  
あへしハあへしハあへしハあへしハあへしハ  
くもあへしハあへしハあへしハあへしハあへし  
てのりりやえ伊能とて二人あへしハあへしハ  
二男壯麻比麻伊能とて二人あへしハあへしハ  
しく年家の方ハあへしハあへしハあへしハあへし  
相傳のあへしハあへしハあへしハあへしハあへし



リ人と思ひふて然るもくおんかきよしとの縁  
此れは惟村の畏き平父惟能のけしきと下  
とて立之りぬ惟能の縁準の鳥憎の川掃の  
幸意をちかけて川たぬそら此縁をきつめ  
しつるあり候村ゆりぬれり候能のよふくしと  
そひつるよ物縁をきとそら此縁の由をかく  
て是はあてし中より支志りいふぬのたひくも  
中よれつるる人よ同のつ道はよの候し道人の平大  
細きものとそ中よつ道は候し初は紙之に物も  
あつていんすのりり大さかき思ふら遠き原

惟とらハヤウんいふ種も集りつて海へまゝしつら  
軍ありしよのかいし志くまア一たえ一いつぬとそら  
ハ伊能中より海もよひ一集せし帝はしき  
まつらと東部はつて海へて道宿と四角八方へ下  
さりと東部もまゝくまそありよとけ帝はよふ  
とくくの縁あるれも海氏に彼素はてそと  
申しはつてあり且足若変とそか一あまは院  
よふ海をり一海皇は海をよふ祖父より東部  
とくくそ海へませし帝はし親祖父は  
さう縁をよやある今ハ今昔はつてそそ

河内院宣と下らるしとるみ細也 友友とてや  
え博多傳の押寄て時と此とけしハ平家の  
方と筑前守家貞ととら軍とて業比京  
田一黨とてむそをせられとも三方余りの大  
勢せぬかりはれぬ物もとりあつた事成とて  
まはりの事ありかりと海軍神の志多人の  
あつりところ細くともなれ流るゝまはり樂  
下もるはれぬ花風翠王の山樂ももりす  
山伏のふく後上人持世のふくとより女房とらハ  
裳唐衣泥よひとてとて我走るとはは出

流りかりや 海軍の車袖のこりてゆめつとて  
あく伝居のやとらとて一管海の松葉とて流る  
あつた日番推宗縁をとりてとてとらのあつ  
り此法施もと頼のんきとてとら今と後四部  
り幸のみそやとれとてとてとて前業のいそと  
とれ今生の感念むとてとてとてとてとてと  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてと  
らすとてとてとてとてとてとてとてとてと  
部の流砂甚願とてとてとてとてとてとてと  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてと

糧なりきよの順業のかるみるれは世の苦端に  
のあり一后妃未女にみよとありて久世たとき  
のたふれに群寮百日の極よとありいなる  
てもなすそ自にありてのほときたよとあり  
却より福ありかふありかた多し一里のなるれに  
るよめはこれのたふりもあつて今更ありれ  
あつりる男海言業のちとつてたふれか  
よとありるふらなりよ一山麓のきふ秋の遠よ  
はそと麓の城のあふり流ふとあり種よ九月申の  
ももろりもろり文あり秋のあつてさつりしよ

うの空ふふのひわく海きのの海り一あつ  
くおひける海歩人の空のよ海もよとあり  
ける風もよふ一そあり海もよとあり  
りまのまのよふのたふりよぬれおよとあり  
よとありよとありよとありよとありよとあり  
十五都ハ名残えよとありよとありよとあり  
くておのたふりよとありよとありよとあり  
よとありよとありよとありよとありよとあり

月をみよとありよとありよとありよとあり  
修理をよとありよとありよとありよとあり

あつとふまはひ今宵の初すく月と女のおもひあはせて  
平太納言時志

あつとふまはひ今宵の初すく月と女のおもひあはせて  
平太納言時志

あつとふまはひ今宵の初すく月と女のおもひあはせて  
平太納言時志

あつとふまはひ今宵の初すく月と女のおもひあはせて  
平太納言時志

あつとふまはひ今宵の初すく月と女のおもひあはせて  
平太納言時志

あつとふまはひ今宵の初すく月と女のおもひあはせて  
平太納言時志



このありより薩平忠及のふとく早と云ふ  
このころ新九年の中をくく柳の山に城を築きし  
は方二帝やを認むるとき丁急りぬりぬの山ありも  
徳よ七十日をわたりしゆりゆありて道徳ありし  
は清く九月のすくまぬ月を満ちてさきより候  
理をすへ候成る

何れ一ゆりまをふりてさ成神也とをたひ出先  
ふてはあの子へ敬き給ふなり小村の大臣の三男は  
中村清経ともよふは源氏に是をまうじ徳西を伴  
能くは追出りつてはありぬるなりさやつてはは

道とて開ふは経を念ひしてあまを志つては  
ゆくとけしと給ふはたのれく長門の新中納言  
ふのふ替へ給ふは六日代他伊氏初を是通御平  
あふり河波成初を是首長におよしさぬきの  
志満よりるたきりの方山本まのこく船よのほ  
てゆきまの老をりぬは志けしやるるに源氏に  
ゆきと志とせりた方ぬよの成若年あひる

道の九女の若たすけ形くあし難としてあふりよ孫ふ  
こま人ちれ胡るさちり難きり何くんまうしと  
て海女ちるいあけよりい難る人す一人あつ射す  
ちるりささちるさあふり難向山ちの形とん  
てけしにちれよのいあふりあくあふりあふり  
さしにさあふりあふりあふりあふりあふり  
くさあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
り人あふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

はハ海の浦の城郭くさあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり





此志と志とて西ふよりさあす甲されけ  
ともやしつゝ院宣成名下とて病く右多  
権依宣長院宣と書て西壺の正以て平大  
御方のよしと書りその院宣と平大御方  
終てたま暁てかの院宣投指はつひと  
都より右を成さておのりせら新く是より  
るよりいも右御方の不行延くおろけ  
るよりいも右御方の不行延くおろけ  
の向まりにかくせとて乃り左法依頼朝  
二上かさる下とて孫念ふ居る征夷將軍

の宣旨を象ほその状とて

左舟官下 五畿内東海東山北陸山陰山陽

南海如海已上諸國

可令為早源頼朝朝臣征夷大將軍事

左史生中原康定

右史生内景家

右左大臣藤原兼實 宣奉勅從四位下行爾

右兵衛權佐源頼朝之朝臣可令為征夷大將軍

者宣令兼知依宣行之

壽永二年八月日

左大史小槻為禰

左大弁藤原朝臣左判

とて書しつりけりしつら左史生年亦やすま  
日九月甲子 徳宗ふらゝりて 兼佐の院宣  
奉勅定の趣と修人等 兼佐の院宣とすけ  
て全廿七の上上詔して院の山並の山並の山並  
て実東の山並と兼くしつり 兼佐の院宣  
りり物ハ勅書と兼くしつりしつり 兼佐の院宣  
追て武勇の志を兼くしつりしつり 兼佐の院宣  
夷邦軍の宣旨と兼くしつりしつり 兼佐の院宣  
も書しつりしつりしつりしつりしつりしつりしつり

かハ藤原朝臣の社禮（まじり）向の又藤原朝臣  
新又男ノ宣旨（兼佐）をわけしつりしつりしつりしつり  
鶴尾と兼くしつりしつりしつりしつりしつりしつり  
似てしつりしつりしつりしつりしつりしつりしつり  
十余所（兼佐）を院宣と兼くしつりしつりしつりしつり  
は（兼佐）を院宣と兼くしつりしつりしつりしつりしつり  
も書しつりしつりしつりしつりしつりしつりしつり  
三浦平太師（兼佐）の院宣と兼くしつりしつりしつりしつり  
上六父の太中（兼佐）の院宣と兼くしつりしつりしつりしつり  
の有りしつりしつりしつりしつりしつりしつりしつり

と免なり我此にあり二人命出十人おとすて  
きある二人中一人を此後思事能成を人の福  
三帝宗実を考すその帝宗十人の大なる人  
御よして多てあり已上三人とありひく甲  
系此の赤威の鑑戒をて甲成て思ひをら  
よとててたのひことつきその勝ときて宣言  
とくけしむすのきんと侍の宣言とつらめを  
の蓋し入るしきて押の使にたれとていれ  
尋中しりか三浦舟といふ名をて三浦其治助  
此もて宣言とつけしきしてて後よとて後

箱のありし妙令を女入てかすいぬ降及し  
と此家の事二志志きて女自らと侍も高振者  
種もて海とよと免のり妙院中官成倍倍とて  
此位一人中とるあり馬引しにた受の何の福  
りし之夜在事つ社候是をけしぬその事出依の候  
つと候ししとあり言らぬ道屋と志のりて境版  
者しとて原結二原十種小重長起し入て宣け外  
上京の信百是作信百文白印百端信百招百端宛  
信百とて言す文と道い申ふ不定に誠宝朝  
る日と出依の信一に誠いしに内初し侍とてもに

十二回よりいさふ侍もあとの大なる宿を並て居  
い内はるほ式も様と似く並居の事なす  
おとも居りか川のけは案縁の事なす  
い、良くあてま出の令に侍て安良成  
番縁の事と一帖あて着とあけらり  
案縁の事と一帖あて着とあけらり  
合下り布衣も著袴もく容形あり  
そりてすしひ記をたに尺一か  
云語分明なり細末はあき  
兼仲より物を使ふ部へ  
向いぬ事なす

よ思てそ末初と跡とあめ  
よつりありあめきみり  
それ兼仲の家我も心  
人かよとまきい  
よはらりい  
の事林の表とふ木  
とも近事い  
ちもあきい  
て秀衛り  
る池美り



のまゝに... 院宣と... 或代仕... の内使... 同く... 之の... され... 日... 之に...

の... 續... 鏡... 少... て... 康... 結... あ... り... 其...

河下千々々なる頃と云てかや〜有りけ敷ふ〜有る  
し石橋の〜〜〜と云は佐原よりけし〜もいふ〜  
付て〜の軍の御物〜後父の御物〜  
〜と云て〜  
猫中納言又本宮冠者御仲〜  
〜  
起居の振舞の〜  
乃か〜  
〜  
信濃本木宮の山下と云て〜

また陸店〜  
〜  
〜  
色と云て〜  
〜  
本宮の御殿の〜  
〜  
〜  
〜

夜のまひりたりと六何ぞそく少科の志をさし給へり  
ちりね難也あきくさく七条坊城王の志と  
南指問と一是に少指多よりせ給へし酒の指問中  
酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と  
さり少指多とハいぬるうと酒くさりしれその死  
能くさうへりけり根井と名く本指多中より  
しれとえ一人いぬるれそさくハ又本指多中  
酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と  
の酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と  
中酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と

給へり本指多中酒のせり人よりせ給へり酒と  
酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と  
酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と  
酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と  
酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と  
酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と  
酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と  
酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と  
酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と  
酒と及ぶ中酒のせり人よりせ給へり酒と

てたりーりたつとるたれぬかきーとさるみ結  
り海見六より記言備は毎月さきつ精進念を  
よそいそとともき入念障の平草のけもあり猫屋か  
し路しやとらけ道に念食てもあよるもやあらし念  
海せれきうりたあそははとくひて自つく合  
子向もとりかきひて中納言とちとああの猫屋  
天将の念をたつーりや猫屋の今きまかき路  
しとけの根井よりて神を備とのとれ急とあけそ  
候とよひの人もいさやうりた因縁国とら難  
ちとよしよとさしちのうりさるは是福とさあひ

そ結れそとせりりたはかかにはあよりて保  
つあしるた入りりらとやあしひのさあきと  
よたうよとあたのあととあそありけ  
もき官なりりた志なりしあこのもあさりてあ  
もあしとああそあそあそあそあそあそあそあ  
あそあそあそあそあそあそあそあそあそあそあ  
の肉た良の量ととりてあはあはあはあはあはあ  
りあはあはあはあはあはあはあはあはあはあは  
あはあはあはあはあはあはあはあはあはあはあ



相りお付てありれ ちうやそい平家合のあはれを  
のちうあめりうとそ甲けける車乃りしちり  
とやんとちけあてまあふりちりさせ終い知ん  
新也チリれ天姓ウナまうの男こそいれ  
城りとりせんちりちけりてちりり終り  
るり

平家合のあめきのちやい海よりあう山陽及そ  
おちりちりあなる以てあれとちり信濃山  
人先回判友代海野 夫平家合のちり  
あ百余騎の勢とちりつるちり平家合のちり

のみやい海より海兵のちり水治り途より  
て海兵平家合の海を隔てさう国十二月一日  
水治り途より少船一艘あま海船釣あか  
もそれるちり平家合のちりのちりり海  
兵是とちり友儀とちりてはあけちり船とちり  
ちあれたけひてちりちり平家合とちり  
余艘のあそ二百余艘とちり部の方とちり  
百余艘とちり百艘とちりちりて海兵のあそ  
もちりちり水治り途とちりちり海兵とちり  
海兵夫平家合のちりちり大田判官

牛島大將軍より三任の中務を御新三位中  
お資盛哉元之任通盛擲のたね軍より新  
中細之知盛門振の中内之教盛以男徳登も教  
徑ありのりつ子の経のけ、ハ東ふ山由のぬ東ふ  
と、めそいけとりよせられ花仕むとふと急り足  
と、い、軍よりよ、るれ船軍ハや、乃おるれ  
とて唐巻津の少神の精ぬの大日、黒赤威乃  
糧のまを、知、端、い、い、あ、と、と、と、と、少、船、日、宗  
て三人よと、る、大、島、口、の、銀、の、ひ、家、ま、ま、と、た、た、と、  
元、持、て、部、の、紅、又、分、持、え、と、も、も、り、入、魚、よ、り、と、も、と、  
と、も、と、と、め、り、と、り、れ、ハ、西、と、向、教、者、も、り、或、ハ、切、を  
切、と、是、或、ハ、海、ハ、あ、入、と、け、。、後、ハ、か、と、と、と、と、  
う、い、と、せ、ぬ、ま、と、と、と、と、百、余、艘、の、と、も、つ、と、と、と、借、合、を  
中、と、い、も、や、ひ、と、入、て、よ、と、と、あ、あ、み、り、と、城、江、海、ハ、  
と、お、と、平、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
村、ら、と、と、と、の、と、と、と、打、お、よ、と、揚、首、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
と、あ、も、あ、り、但、て、落、し、の、も、あ、り、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
り、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
よ、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
負、軍、よ、り、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、

牛島大將軍より三任の中務を御新三位中  
お資盛哉元之任通盛擲のたね軍より新  
中細之知盛門振の中内之教盛以男徳登も教  
徑ありのりつ子の経のけ、ハ東ふ山由のぬ東ふ  
と、めそいけとりよせられ花仕むとふと急り足  
と、い、軍よりよ、るれ船軍ハや、乃おるれ  
とて唐巻津の少神の精ぬの大日、黒赤威乃  
糧のまを、知、端、い、い、あ、と、と、と、と、少、船、日、宗  
て三人よと、る、大、島、口、の、銀、の、ひ、家、ま、ま、と、た、た、と、  
元、持、て、部、の、紅、又、分、持、え、と、も、も、り、入、魚、よ、り、と、も、と、  
と、も、と、と、め、り、と、り、れ、ハ、西、と、向、教、者、も、り、或、ハ、切、を  
切、と、是、或、ハ、海、ハ、あ、入、と、け、。、後、ハ、か、と、と、と、と、  
う、い、と、せ、ぬ、ま、と、と、と、と、百、余、艘、の、と、も、つ、と、と、と、借、合、を  
中、と、い、も、や、ひ、と、入、て、よ、と、と、あ、あ、み、り、と、城、江、海、ハ、  
と、お、と、平、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
村、ら、と、と、と、の、と、と、と、打、お、よ、と、揚、首、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
と、あ、も、あ、り、但、て、落、し、の、も、あ、り、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
り、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
よ、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
負、軍、よ、り、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、

海北を平川尻の合はるる一とて新永新永  
 又遺武老八人一船を寄て奥のよふあまさらり  
 船よりおほほきく海風をけくくりきり踏沈て入  
 舟海皆舟よりり平あま船中より船金鳥先田名一  
 けりけしは三百金艘の船のしもつらと切取するま  
 さらし船と寄て船腹をかむけてるもとさけりあさ  
 ひとと寄て船腹を先をすてれあのかけはげし  
 うちりさきく船腹のああも各也とす  
 ありを向く船人けりり美仲はとすてそす  
 があてりりもそあて日と後て結中ふとそ

下ら三月小陸原にかかるとある篠糸の歌に徳川の  
 娘尾を寄葉原平の舟寄長足は秋明威故師とそ  
 捕ら志りりけり舟明といた葉海あすてきり  
 と葉原とあま原とそ本そ二心さきやうと陸原  
 本今にそそきよとていさ思ふふかきとそ今以後  
 いららりんまらりきり八面をあとうけて今にそそ  
 せいらんとやて肉らひはあけは本多と付人を  
 を新ひらる藤子蕨の根由とそり本あやろ漢  
 本かからりりりり遠く是の初成はすとそむり



一の命の悲めしき事なり奉る難儀の象を  
らして皇過を防ぎ國を酷將よかきと  
此儀と養夜にありしを皇の此の儀と  
よびてありしを新とより事とすといふ  
りなりある事にはせんも心くかき  
ありしにた二ある事ありしに  
よもしく故にゆく事ありしに  
申さるも逐人とありしに  
と謀りかく振舞ひありしに  
りよとせ

嘉永二年十月四日 本意 船をゆり塔戸  
是れ今當りし事ありしに  
て傳申しし事ありしに  
ハ今ハ兼康 惟を法元先  
ふ山守の事ありしに  
て兼康とをいふ事ありしに  
ふ左衛門兼道宗俊と  
康とをいふ事ありしに  
本意とありしに



早に酒のさうぶなりけぬふよるをとりて本  
音とまわらけり後六津所にて音にほろり  
万珠の歌向ふともあやさくかきくまよ  
たどさかきそ我方いろの宿より麓の念光の翁  
もまわりまわらるるものよそ妹尾左衛門といけり  
あまののみふあす毎こちえりしるものよそ  
又つよして兼宗よそ吾早敷くしけりやらん  
と命かけぬかたのよそありとまわりや地ふ  
ほろり候輩ともなりそ兼宗またしてなかに  
このあかりありともいもるのたれも向ぬあやせ

あまをいへんとてあまのあきと成中さきむき  
い悪りつりつてあ社のいそあやめり人それしあま  
と兼宗威儀師とあ兼宗よそ預とまきりし  
念光の供えりるりあ社の長きなるれ白の松の秋の  
いそよそ吾早敷くしけりしるりとも中より妹尾左  
衛門かけぬ兼宗よそ山陰の軍といけりし  
せしれそあつりあまをすうていそま成えり  
平家のいそよそあまのいそよそあまのいそよそ  
よこさしそいそよそいそよそいそよそいそよそ  
と一そいそよそいそよそいそよそいそよそいそよそ

以て妹尾の先とも馬餅帝あて持する輩なる  
 平家より分りて願志はよきなりぬおの具持ぬおのハ  
 妹尾より為りありりるそと事にて却にかいの際にて  
 又はあひ回復しものともあり或る希ふ御よあひ  
 事なりともはものもあり将りし日ともいふは又さら  
 てかきあひあひいさかりはかみとさしてかきつ  
 りるものありては二百人たりり集る  
 おなりおの具持もはもの七八人よはさなりりり妹  
 尾を希ふ御持よりありてはそれ居る余と  
 ち人ぬるより一にわかれあえよりはかハ余と

のつえはちよとてはては妹尾を希とのいとは  
 て馬餅も尋出然どもせよせよ—この御持も尋  
 とゆ—またとては余と及よと昔より山をまてし  
 お使とて下もしてはかハ—使もま—せよとぬ  
 と事なりハ本なるたを尋ねては御持の持ハ何れ  
 と事なりとてははち中騎りちよいり—と事なれ  
 いたさハ兼願らちちとてはささむひつもの錢や  
 ちかつぬおりるてはあ各し—とては二百金騎  
 て今家と尋ねる御と日と分り地下のあちよ  
 ち二つよ付くぬり日夜北よとては余ととては

そよて 兵抄のりりよとそそりもあそそ創の海  
として 福祐ちるるをほりてけりけりけりけりけり  
て 越前とあつてしるるの島岳とてしるる  
井とあつてけりけりけりけりけりけりけりけり  
めとあつてかたとてしるる城擲とてしるる  
と 押あつてしるるの島とてしるる  
さつたしるるしるるあつても 替へてしるる  
くやあつてしるるしるるあつても 替へてしるる  
も 知名とてしるるむねのものもあつても 替へてしるる  
りあつてしるるしるるあつても 替へてしるる

左のふち移村つてして 主従三跡干本とてしるる  
お揃てしるるしるるしるるしるるしるるしるるしるる  
右跡兼道とてしるるしるるしるるしるるしるるしるる  
らあつてしるるしるるしるるしるるしるるしるるしるる  
もあつてしるるしるるしるるしるるしるるしるるしるる  
とあつてしるるしるるしるるしるるしるるしるるしるる  
よあつてしるるしるるしるるしるるしるるしるるしるる  
かあつてしるるしるるしるるしるるしるるしるるしるる  
ぬあつてしるるしるるしるるしるるしるるしるるしるる  
もあつてしるるしるるしるるしるるしるるしるるしるる

て丁を死にけり御下はへあつて今一皮着ても人  
有りゆと軍に木をよき生補てけり此の御  
之はうてもとも御中さまやこども心とも妹尾  
尾あを 寤却の何ゆりに因章てりともかく  
ふりとも人ともらるる一も一ふち御も  
ふりくあそある一知ともかくも中りなてか下  
少若御と一雨をををんやとあつてはつてはつて  
宗後もさあ我はなはつてさうく一せはくとも十  
余所た一里かあて少若御は足痛て御ともあは  
を考て御と一ふり一死人ともて御りともあひ

と云はれ少若御を考あつては御あつては  
あつてとらうく一あつてはつてはつてはつて  
あけ後ふハ木を何てく木をともあつてはつて左  
御の末若 三百余海王てせめともあつてはつて  
くけり一葉集は少く御あつてはつてはつてはつて  
と云へん入てさうくともあつてはつてはつてはつて  
つ尾妹尾を御一葉集は少くともあつてはつてはつて  
つ鬼く射て十三海王と射かへ一鳥の文のあつて  
ぬ妹尾を種つてはつてはつてはつてはつてはつて  
息小若御もさうく一物へ一ふり一自害してはつて

より神宗宗儀よりかきめりし時尾の節あり  
宗儀と云はるのめ自害すといふ事あり  
さて命の先をとり合はるる時尾の節あり  
て死よりし本名時尾の父も自害の節あり  
海中の時尾の歳入の足き万壽尾の時あり  
地代よりしるる時尾の節あり  
よの足高兼光の馬とてしるる節あり  
との節ありしるる節あり  
院のまゝ人しるる節あり  
はと告よりしるる節あり

節ありしるる節あり  
さてききよしたる節あり  
て丹波小川ありてしるる節あり  
はと告よりしるる節あり  
平家小川ありしるる節あり  
ちの軍よりしるる節あり  
是平家射をとりしるる節あり  
たきの節ありしるる節あり  
盛次よりしるる節あり  
はと告よりしるる節あり

新中細を七千余騎よく定坂とあひませむら  
多の十部能人出束つ陣の勢是とる人てあき  
志りくさく二陣の向りけりも路指えり  
の林一かちくさる家と道と遊落て二陣の勢あ  
ゆまむらふとさともさくさく山のぬり  
射切さるに傳ふもせあひりさるるあす南の  
さきと遊落さる五陣の大者よせ合り新中細  
多の傳ふ能に九部とて足部三人ありら  
う精者の少有りら。成先とてらの上のさ  
らして討させらる西ともさくさくさくさく

りりゆああるいさそと引返り軍を討さつり  
て遊落ともさくさくとさくさく二陣の勢山  
の峯よりもとの法よさくさく集てさくさく  
ゆあが勢またたかされてゆりゆり中さくさく  
陣と一さくさくは向てさくさくさくさく  
まを成と成せやさくさくさくさく破り  
二陣の付さくさくさくさくさくさくさく  
てさくさくは十年能人さくさくさくさく  
いさ余隊の勢さくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさく



お軍のあまのりえち一ヶ所もあつたりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり

あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり  
あまの命けえけのお入るよりりりりりりりりりりり

道とてふものありては一衣袋とては記さるけ  
とて男も女もえんはくきとてはけりけり年  
家の世の中は六波羅殿とては記さるけは六波羅  
をいふとてはかきかき目録合々食物を  
おとすりよとてはかきかき老るも若も勤さあつ家  
丁を斜るすはあつあつとては記さるけは  
加賀守井とては記さるけは又よとては記さるけ  
は中一院の少僧よりは記さるけは記さるけは  
呉の僧の殿の判官とては記さるけは記さるけは  
籍とては記さるけは記さるけは記さるけは

夫とては記さるけは記さるけは記さるけは  
ては記さるけは記さるけは記さるけは  
道とては記さるけは記さるけは記さるけは  
世の中は記さるけは記さるけは記さるけは  
るを記さるけは記さるけは記さるけは  
や記さるけは記さるけは記さるけは  
多記さるけは記さるけは記さるけは  
るては記さるけは記さるけは記さるけは  
は記さるけは記さるけは記さるけは  
指籍とては記さるけは記さるけは記さるけは

うはじは本あるうらる。思やりのハ先じあに  
のりもやうとておぼしめておぼしめとておぼしめとて  
うすい平皮よりおぼしめておぼしめておぼしめて  
地の穂藉つやくを敷ふておぼしめておぼしめて  
うすい平皮よりおぼしめておぼしめておぼしめて  
らん又糸申あるおぼしめておぼしめておぼしめて  
おぼしめておぼしめておぼしめておぼしめて  
今より後よりおぼしめておぼしめておぼしめて  
らんものとおぼしめておぼしめておぼしめて

尺身ふ入あるうらる。思やりのハ先じあに  
て糸伸つやくを敷ふておぼしめておぼしめて  
おぼしめておぼしめておぼしめておぼしめて  
おぼしめておぼしめておぼしめておぼしめて  
おぼしめておぼしめておぼしめておぼしめて  
おぼしめておぼしめておぼしめておぼしめて  
おぼしめておぼしめておぼしめておぼしめて  
おぼしめておぼしめておぼしめておぼしめて  
おぼしめておぼしめておぼしめておぼしめて  
おぼしめておぼしめておぼしめておぼしめて  
おぼしめておぼしめておぼしめておぼしめて

そとつづつの人なきくくたりとたりあつて  
みよとせせとせしやうりりはあつた  
と院の中と取ぬたしをさやうにりせ死する  
らんものとかめして法のはさる先をいふとさ  
城もふえとてその田のりりけしは知康さ  
あうりゆりまるとさるは本宮あつてな  
あつと志路ふつあつとあつとあつと知康  
あつてうりあつた鳴呼の考をりりか  
かくとさるは(可)勢と経て追付はたやとさ  
りり知康の究竟の教の上のさるはれは教

の判書とさるりり是と本宮の信をかくりりた  
りりあや本宮から荒考とて院定ともさる  
せは教と本宮の平定かくりりとて院の  
あつとあつた札と書てさるりりり

あつとあつたさるりりかてからさるりり  
ほふはあつたさるりり入て堂塔の像とやり焼た  
らひはあつたさるりりあ

神符もあつたさるりりさるりり甲あつた  
と追付して法中の人とさるりり知康  
あつたさるりりあ

く今も後人せし事も亦ひしくと心な  
く法住寺より城郷を掃くをたを百集れ  
るを以てゆきとるしとて明言 天正五年  
より一り法住寺の八条文の寺の長史と  
するが法住寺よりあるひとてきて二  
の悪僧をとりてまづしとて一り  
善とて法住寺よりあるひとて一り  
修しけりし事也 日本陸軍の  
源氏ゆきとて徳持武志少将の  
ひとて我もとてまづしとて一り

徳持法寺の別当長史より修しけりし事也  
西の寺よりあるひとて徳持武志少将の  
ひとて我もとてまづしとて一り  
あるひとて徳持武志少将の  
天正五年の出来事とあるひとて一り  
このち法住寺の別当長史より修しけりし  
地の綿の玉に眼病具足とありし事也  
法住寺よりあるひとて徳持武志少将の  
てありし事也  
あるひとて徳持武志少将の

集て此の口言の滞りひらけりきりし方の人  
ふかづひひりりりたのたの地所の町人町冠志系  
田原妹岡地も合は師合我の指もろくもつよ  
用もゆゝゆり御ねくしてよけはのいせり  
の多くまはゆけの用のまはゆいとい人あ  
りまうま言是とせりまけりる平家の保長を  
起て天保三つとてしちまのしせも人とも換へ  
まらまら〜思ひ幸久〜あまやうてよ〜りり  
合も持てまのありて天のさ成より〜まらり  
と幕代のまら〜あ〜まやそれゆゆ〜てと

介ら〜ら〜のい〜も〜あ〜のい〜あ〜り〜  
やま〜物もの目〜す〜は〜ま〜る〜も〜れ〜一〜  
あ〜ぬ〜い〜い〜このあ〜と〜た〜か〜ん〜ふ〜ま〜換〜ま〜と〜り  
ま〜田〜か〜ゆ〜て〜ま〜な〜か〜ち〜く〜あ〜な〜ま〜り〜さ〜る〜  
とて王城とち権〜てあ〜ん〜あ〜る〜る〜天〜川〜  
わ〜ん〜る〜る〜ま〜ら〜り〜と〜て〜ま〜あ〜も〜お〜入〜大〜臣〜あ〜ん  
もれ入〜て〜あ〜せ〜ま〜い〜と〜せ〜し〜を〜奇〜怪〜な〜め〜に〜時  
あ〜け〜る〜た〜お〜と〜う〜ら〜と〜せ〜ん〜と〜院〜の〜あ〜ま〜ら〜ぬ  
とあ〜ん〜路〜ら〜ま〜い〜や〜あ〜る〜是〜と〜教〜め〜る〜流〜を〜及  
りあ〜あ〜ま〜の〜目〜教〜め〜と〜と〜破〜て〜換〜る〜人〜と〜云

けいさいにあらざる。及ぶるありともあり。樋口以爲意  
先令井原第 兼平 ありともけい八十その帝  
きよ向まいせしてらるる。あつてもあつても人  
いひぬく。人いふあやまもせ。後ふ。いひぬく  
も陳。いひぬく。せ。後。甲。せ。ぬ。き。ら。と。ら。い。ひ。ぬ。く。  
人。い。ひ。ぬ。く。後。ふ。い。ひ。ぬ。く。い。ひ。ぬ。く。い。ひ。ぬ。く。  
けい。ち。ら。い。ひ。ぬ。く。年。其。何。なる。軍。志。つ。い。ひ。ぬ。く。  
後。ふ。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。始。と。し。樋。田。川。破。産。山  
あ。り。い。ひ。ぬ。く。第。一。海。中。小。板。倉。の。城。を。降。し。き  
て。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。

い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
ぬ。き。ら。と。ら。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。  
い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。い。ひ。ぬ。く。の。軍。と。と。ら。れ。も。

り下りしは流流本多きよありしそは流流氏の  
軍云天香山一登りしよりその後本多きよとて  
入狼藉の悔り事と斜りしそは山門の領事とて  
は流流氏の法よりしけしは流流氏とて本  
多きよとて皆中世よりけり依り義仲急状より山門  
へつたしけしは流流氏とて

山上貴所義仲護鮮

叡山之大眾悉振上神輿於山上猥構城墉  
於東西表不聞修學之窓音偏專兵杖之營  
云云尋其根源者義仲結構惡心可追捕山

上坂本之由風聞此余極僻事候且滿山三  
宝護法印令垂知見給自企察洛之奉仰伊  
王三王之冥助顯者焉山上大眾之與力今  
始何致忽緒哉雖有歸依之志無凶惡之者  
也但於京中榻山僧之由有其聞之条尤恐  
存佛号山僧好猛惡之輩在之仍為糺真偽  
粗尋美之間自然狼藉出来候歎全不滿通  
儀惣山者開可令軍兵登山之由依之大眾  
下洛之由美之是偏所天魔之構出歎相互  
不可有信用忘以此旨令披露山中之給状



如件

十二月十三日

伊与守義仲

進上天台座主御房江

とそきりりる山ふらふらこけも志のあしむは輝  
記と申へりむり同の武王殷の王と討と志  
けりよを天よ小雲寒て雪降とたさそは是よ  
余り丑車二馬よ一歩の人門布よ来て王と御  
て討と取へりときてさ人ぬは言小車らよの跡か  
一是則海人の天の使とて其らなつて一物

後計と付りてとほりき漢高祖を韓倍加軍  
一圍もそ危りりけりよた城よ言りり同て逃  
る一ととゆり本言ぬ人論五難は神よとかり  
とるもすり何よとて天の賜もかり人のあはれを  
むつさるぬは法皇の心積もつてゆくゆく知原  
日経て急な可進討と申すゆり知原を赤地  
の綿のまきあよとてと後とまきゆりり甲とゆり  
とそそきりりる四天王の像を傳よきて甲とれ  
一右のあしむを金剛槍とゆりたすを伴とゆり  
法任寺殿の四雨の薬地のとるよのゆりてと成す

ひまを討てて新くうりしれとるよの知康ふ天物  
のたよりりしとるやうりし本勇の軍の古例又陣とを  
はよせしよ分て一よふ二よりけ合りり榎口陣  
兼え六三百金満くそ新態の方へ括せし陣六  
自ハ各居しるやあはゆりし河原く池か七系門五  
一け合し一そ二系とわく系共もあ楯楯并ハ三  
系とわく楯并楯門ハ四系とわく流粘見中ハ揚  
楯とわく自隊別高自塚を舞ハ休養中とわく仁  
科高科とわく山田高ハ六系とわく道ハ高合分并  
高合とわくして七系川高とわく向ふ高自ハ合

よりそ勢子跡なるよりりり義仲改しおま  
きまくりはく大羽軍を康以下田國官云少雨の  
軍兵に敵と人侍中間山法師以下二万金満とそ  
向りり本勇同系へ折出流移すあれ時とそ他て  
このくたあきあしくたせそ西向の門際へ素よせ  
より知康進出せしるハ業系も高まよ向て  
りより先と敵とよりりあまむらハ定高と  
清くけられハ括する軍本も花屋を菓るり  
本水使ハ水遣く思忠神も高休けとかや未  
休とるあまそ其の身とそよりり高とハそむよ

くまや へんちく 後人 朱の 還て 己 著り 并に 何こ  
る 了 ぬき して 秘を 小 昔身 を して 如 以 方 より 秘 矣  
に 秘 矣 けり 夫と すと け ても とも 己 著り 甲 六 十 七 年  
ら 一 述 ぶ け 行 返 せ せ とも け け 本 方 夫 又 あり 著 して  
さ ぬ け せ とも け 著 して かく せ け け け け け け け け け け  
く ち せ け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
と せ け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
徳 聖 の 方 け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
著 け け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
僧 流 運 舟 志 折 神 も 身 け け け け け け け け け け け け け け け

志 け け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
ら け け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
け け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
と け け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
西 け け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
後 け け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
海 け け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
め け け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
よ け け け け け け け け け け け け け け け け け け け  
人 け け け け け け け け け け け け け け け け け け け

百てぬせかんとすものなりりりるも皆能きもの  
はよのものいふるなり死志なりそ邦の老もも國  
少少と進玉くかこまゝとちせせせらり  
こその教と志もを漸とも云らり此七条未  
を扱はふ源氏多田源人を治冠志左衛門を帝  
町めりりれも七条を西へあるり軍以あはを  
地の老も源人とのみお伏しし知原知志  
りりれに在能人お家のつゝのりてたてをつぎ  
ふつあそとめて拾ふて治ふよはあのみさしもの源  
けふと款の源るとりて敵ねとししと打りれか

是をいふる院方をも西へ名原をさまけしとえん  
れもさへいふる院宣をいふる或るもさうおをせ  
ふくし并けは多くの人を打扱せさるるやうし新  
のりよとあてしとまかんとまゝのさへ向の屋の上  
ふりおあいつこゝとまゝとあのみとすく向くそ  
源よりりいふるもいふるものもわくひりりりおね  
判友光長ハ伯耆守よりりり高志なる耐光源治  
非遠使よりりりり父ふたよかけおねとあて  
お死する治徳公の伯人村と判友代父と七人義  
ふりりり二高判友代才をお死してりり残六人



親志才八法は節の端と申す事にて申す事  
まのらせてみ兼ね内妻も後て守備しあてま  
る家長は少佐も官を和の今一人も尺一  
大方角常斗文よりとも切回を介する  
少のとも地法しきり今今一を執入れぬ  
而も大より一り七条侍使信信犯伴守龍光  
只二人のりり地もあつる小船よ今まのせてさ  
のせりりれともあつる夫ゆきかかはりり  
けしハ信信もハ内のもてせ給るりりり  
あるそとやとれられたる成りりせきりりり

心く悲陰そまると六の船の底に伏まつせてそ  
盾より召初ま今一坊城後一りりりりり  
れより因流より一りりりりりりりりりり  
たのりりりりりりりりりりりりりりりり  
山所より始て今一の船を斬りてさるりりり  
るを一字もみ残さる焼亡よりりりりりりり  
ハまのりりりりりりりりりりりりりりりり  
てかりけりりりりりりりりりりりりりりり  
さるりりりりりりりりりりりりりりりり  
開てゆれけりりりりりりりりりりりりりり

居たりらるゝ為懼まのこ我射身く書て人々其に  
ちよりりその時我ハ播下の中ねとて其を保ちて  
まゐるゝ強うぬ物まの後けまハ播のち命あるま  
りまひとり生れしそ宿あまし海に先命をけ  
るまゝと神氣も信けと云人ありり命衣はまゝと  
りしてあけりり彼ま今くつゆも難るもつち  
失り人一人も又一ま二方よりハ武士責其の一方より  
ハ是標押殺ていつまますしきやもるゝ大相の  
あらまるとあゑんとも志る物は後より射つゝぬり  
ねて死すらるゝ無慚とも云たりなりゝ水正近業

ハ大和記頼葉志人々子孫書まのかり衣は上々り  
て芦毛の馬は乗て七条の系と西へ逃けらるゝ本  
當、命未今井は命逃きて書まの振法なりとい  
たりらるゝるゝり道はあまは語て死すらりかり衣  
のりまゝと巻見たりらるゝや相行道の情士なり  
具と書すゝと不し然と人傾りらり河内書者書  
我人仲業ハ南の門とてあまきりらるゝ近江源氏  
高利冠者義弘おとせりさあまは及東はるゝとが  
とあま今とこれまを院地まは幸なりとらも  
のまゝとあけしはさるゝとそはあまはさるゝと

こりの如き人をも南へ向て流るりし河内守の佐人  
加賀坊源秀と云ふもの尊なるもの推しては後々  
あつりける源義人々おきてつるりけるのあまり  
ふとあつて衆議の家つしよおむしやうしんきよ  
とりりしにさしゆく仲兼つるに為かえんそて親も  
ある島よ妻尾白かりけるはあつるつりも後八橋事  
つらた馬場のさつよ二十千きつてひるる中り  
けあぬす時斗戦くさるしにて思ひまかか場  
と娘とてあつるも女仲兼も後三橋斗破て  
とせりりしが加賀坊りあつる妻白るをいづて出さしけ

其源義人のあつた信の公卿打ちよふもの源  
義、あつるしよとい志すて舎人曾のあつてける  
い病入るもとえそへ僻しるさ人が我りるも  
ねよりりなるもいそとさふ人となけしにありて  
あつたや病入よりあつるもいそとえそへ  
よとちいむけさつりけるもあつた人のつる野の中  
丁もあつて信の公卿とこさるれそあつてあ  
入付たしつり源義人のあつたしよと道徳及忠義  
てあつたしつり源義人のあつたしよと道徳及忠義  
あつたしよとあつたしよとあつたしよと







以清志のひて世の心願とわきまこころとてふ我々の  
初て文の心願とてそな増り

故少他言入道のまよふ宰相修憲とそ人かひり  
若全戦のまねとあしくおんれは上院とそ  
亦言とりまうてまよのまひくそまひくまひく  
目六ふふそり今之故又事のそ人そまひく  
ハ信新ふそりまひくまひくまひくまひく  
やとそ入すりそひて戦ふそりそりそり  
そり又東内裏まられそりまひくまひく  
て入てりり信のまひくまひく信て戦ふまひくと

今之故 龍顔とる 一も人々あま  
そりそりそり信のまひくまひくまひく  
威風とそりまひく信のまひくまひく  
一も信のまひくまひくまひくまひく  
こころとそりまひくまひくまひくまひく  
道長とそりまひくまひくまひくまひく  
及の軍を維くそりまひくまひくまひく  
宰相入及殿と押してまひくまひくまひく  
ええとせ信のまひくまひくまひくまひく  
そりまひくまひくまひくまひくまひく

盛も由負て百死一生とて取ひし事とされたり  
水に漸や明雲の非業の化すき人今そあるき  
よのよとびさひ我らも多くなりけりかたり  
こそそいふみことなりとせ流るるこそおりのけり  
良人ありて又作ありるる我らと地粟を  
いふる我らと生るる十戒の力ありて十戒の位は生  
るるよと世の罪報よと成りてはかたはるる目  
とらりんとおもひの人我のさるる十戒の位は生  
りてとらり人させ流るる事相入るるこれら  
は物類とあやほちなりとそそ流るる及ぶよと

らまいたんや法師とて年々も人よおそとや日  
月天よのやけりてとそよのけりあり神明地を  
照し流るる中害ととすあひき流るるやとら  
宗廟すて流るるよとそ神意ととありせ流るる  
して知康女我のぬあり奉り中けりてと流  
谷山けりのみとそ只信おそとてとそと流るる神を  
そと向りるるよとそ流るる軍よと打掃て今と須  
ともと流るるよととてとて今と万事おのよと  
ねの内よあり人も流るる人も我らあり但内よ  
書りて一日とてと流るる法師あり肉も流るる人

そよひの風かきし流し人そは  
まじりたる人そはまじりたる  
今年下の節来ともきけり  
あていえるぬとて水は  
らせ給ふ難しとてきけり  
とて押して服の別あはなり  
其のよ揚改とてまじり  
てまじりたる人そは  
とて押して服の別あはなり  
其のよ揚改とてまじり  
てまじりたる人そは

の折書とてちた臣折書あはなり  
のちた臣折書あはなり  
くつらり給ふとてちた臣折書  
の人中りたる人そは  
宣りたる人そは  
八日之来大内とてちた臣折書  
早九人とてちた臣折書  
そよひの風かきし流し人そは  
他も下節とてちた臣折書  
節書とてちた臣折書

の悪行ふるるといふことありけりし時ハ少僧より  
之内判官に朝暮たつての尉肯成二人ありて  
尾張の地りりける其の末に徳依の才高冠  
範頼の弟冠衣我道ある勢田大宮司の行は  
おのまこと中よりハ本より 僻事とていふこと  
とありけり人屋後まてよりいふ事ハ平家世を  
一後東ハ玉の幸貞と不道送り若くは  
ハ僧人やりんお目因代もろろやりんととも  
上道の狼藉もありけりハ平家世後三ヶ年  
未とらるる目とていふ千人の士と指はる

二人は法住寺殿より合戦とて一少僧と焼  
いふりハ官中より東より大將の回りと  
ハるよとやりんと今午の口命を打ちて  
不破の雲とありとていふありとていふ  
も合戦とていふありとていふ軍せん  
白人とていふとていふの件はわけて  
ハ飛舟とていふとていふと相伝はる  
時成化にていふとていふハ  
されたるハこの事ハ明はぬ  
はやくとていふとていふとていふ

朝初と日、強て徳念のまをせり軍のときこ  
るにけしきくし人一人もあつり此の昔年十五歳は  
ありり端の文のち初と下人うしてりりり徳の  
ふとるよのせ屋のまをせりあせり徳をくちを  
知康の凶害よけはし乱を登り一うよし中を  
いさ徳作大の驚て義伸斎在りてハ我度も  
頼朝よあ回きてこそ休のよあ空の右君と中初  
まいせてはふとやせあの丁とゆきるれま  
のよとさつうし人あつてハ自分以後僻まのま  
あま一知康あつりハかまをくちまされりれ

此の知康陸世人とて追付徳念ハちてま忠依のま  
あてんまよ入人と仰せけれともあまこせまとの  
徳のまよ入人あつりりり徳のまよ推集あつり  
此のまよあまのまけ徳中よりん出して子もた  
は智よりあまのまあまきりくましくりるまあ  
知康の危きまの比布のよまよそあんなあまこれ  
よて比布のまよ一とそ砂念十五歳まあ一徳市  
けまのまあまはまよ比布のまよ一とあ  
りまの知康十五歳のまを徳のまよまあ  
手實あつり徳を奉るまよまあまよまあ懐中

またに危きなり石とてきてやうく扱とよき海の日  
よりわたりて教旨千の比布とてうてよきつきた  
右のもよきつきさぬく又礼葬して歎と云ふ  
よあけて討せりついでにけしハ幕中より始  
て多慮を志す大志小志思入て急法付の志  
よそありける城と名をゆへる者の志ありあり  
りりてその後え集せられり此ハ知康本宮  
の部人入るをてふとて巡捕一古臣公にまを  
わすし控門勢とあつ山頂ともてうて此れ入る  
糧籍とぬりさん神社佛事とも思ふてあつて

當塔をゆかり焼とて後山宗法経ちとの押寄  
て合戦と致しハ衆の志もたれさせ給ぬ天名  
片も明書傳りも瑞き給ぬとありもあきと  
も毒りやられともき傳佐先をてころあゆまり  
わらう法を造りてゆりてこれハ知康押と  
のよき心地してすくむく又此布のりり  
然ハあまのうる又知康と云はれもよきとより  
今て院もとも正つりせ給へるもよきと  
りりりたりるき比布よめてくき衆佐又集せり  
れりりり



去程より東より西のよけ今身かたの以西  
範頼九節の骨日義經と大將軍とて教方  
跡の軍を指副とや二へのいせしる多と可討の  
しとて送りし山も構状あり其状云

牒遠尋往昔近思今来天地開闢以降世途  
之開依佛祖之鎮護天子治政依天子敬禮  
佛祖增威光云佛祖云天子奉守故已干茲  
云源氏云平氏以兩氏之奉公者為鎮海内  
之夷敵為誅国土之奸士也而當家親父之  
肯依不慮之勸誘處叛逆之知罪其刻頼朝

被害幼稚預干配流然而平氏蠲步洛陽之  
棲恣究爵之位家之繁昌富貴而誇兩箇朝  
恩偏愛余皇威奉討三条宮曰茲頼朝為居  
為世追討凶徒仰相傳之即徒東国之武士  
太治兼以後勵勲功之間以山道北陸之余  
勢先令襲之慶平氏退散落向西海之浪爰  
義仲等忽忘朝敵之追討先中賜勸賞次押  
領国在無程追平家之跡專逆意太十一月  
十九日奉襲一院燒拂御所追捕卿相就中  
當山座主并御宮令入共糾叛逆之甚矣古

今無比類仍催上東國之軍兵可追討逆徒也  
也權其昔雖無疑且祈請佛神且大衆之與  
力殊欲被刑率仍牒逆如件以牒

壽永二年十二月廿二日 前右兵衛佐源朝賴朝

とそがしよりける山門の元流は牒状よりて三塔  
會令して詠るを來依りて口より平家又西  
玉よりせぬのける本居東西より返して平家と一  
つ成て東東をむむきし一ひよりやめく謀を  
めくしつてくし志しきくふあはしきと  
き帝よりとよき合はるるもあせしるる人の

よりとやありと尋られぬ東山よりある僧と一入候て  
帝よりしてありしり由名は僧を一間をばし今  
門出のよし仲二移てゆきとあ湯のよし  
文を書せしよ本多のよしあも遠をけ僧文と  
二位後ハハあよき雄やあしきく聲よりりま  
今より候るあもくしりあさるるよしひ流く  
かもしそよきよハ酒造大明神のよし討ま  
了るよきせしりあして文二通かせと通よ平家  
右位及くよきよ一通よハそ母の二位及く書せ  
辨色男とよきよ西よつりしよ二位及く

もたは後にもけ文とえしてこれに候後よりきめやと  
之りれりけくと新申納言の給りかちあるか  
のわらんかこれに道にも本旨とてあらうて  
中へ入る先よりともか人おももつてい  
とともあはれをかくて天かてはさむ  
其甲せぬさちとてつて階へ入る  
あつてその給りか本旨とて  
と追捕しを續上下ともやま  
いふ法後と候後よ人と候  
あつてと年給候中て  
あつてと

うもあ身もけ一門とまむそ  
もさもあやとち候よの  
そ中これけの控免三位の中  
まに、あけてもあつても  
しかりそあの新あつても  
まあ重京石重丸をさち  
この天もあつてもあつても  
そつあつていけあつてい  
我がのあつていけあつてい  
してつあつていけあつてい



よもあはれあはれなるれもかきしよるまゆ  
よはありりれふ奉靡りうたれもあもあも  
しむらりり信らもすすしむら平叙入る平  
まそせとよめあらふあもあもあもあも  
うらん部入今より塔まも回せはよあし敵  
胎のしんまていそ入置はあもあもあも中  
これ秋のお白せめあも入置はあもあも中  
いありよとあらあもあもあもあもあもあも  
もああああああああああああああああ  
あもあもあもあもあもあもあもあもあもあも  
あもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

り果来のいん井始れけし同十百本多除  
口とけしてあもあもあもあもあもあもあも  
けも平あああああああああああああああ  
の別ああああああああああああああああ  
あもあもあもあもあもあもあもあもあもあも  
のら領中あもあもあもあもあもあもあもあも  
も神は佛寺の店領もあもあもあもあもあもあも  
前候後漢のら王剣あもあもあもあもあもあも  
十八年我中あもあもあもあもあもあもあもあも  
あもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

人して... 今年も... 秋津園... 命... 氷... 命... 命... 命...

